

地域漁業学会

会 報

【発行】

地域漁業学会 事務局
〒890-0056 鹿児島市下荒田 4-50-20
鹿児島大学水産学部内
chiikioffice@gmail.com
Tel&Fax 099-286-4280
<http://jrfs.org/>

No.97

2015年8月

目 次

1. 第57回大会案内 学会事務局
1) 広島大会へようこそ 2) 実施概要 3) シンポジウムの概要 3) ミニシンポジウムの概要
2. 第56回大会印象記
1) 「漁業」の営みと実践から「地域」を問い直す 黒田 暁
2) 「地域性」を中心に、「学際性」、「国際性」も発展 磯部 作
3. 第56回総会報告 現地事務局
1) 55期決算報告 2) 56期予算計画 3) 学会賞受賞者
4. 研究会報告 近畿部会
5. 事務局便り 学会事務局
1) 個別報告・シンポジウム原稿等の受付について 2) 学会賞の推薦について

1. 第57回大会案内

1) 広島大会へようこそ

会員の皆様、お元気でご活躍のことと存じます。さて、本年の大会はすでにお知らせした通り、2015年10月24日～25日の日程で、広島大学東広島キャンパスで開催いたします。やや不便なところですが、以前に比べて、ホテルも交通機関は多少改善されています。是非、お越しいただき、活発なご議論と日頃の成果をご発表ください。

中四国部会が中心になってシンポジウム企画を立案中です。『漁村の現状と可能性』を総合的な視点から議論をする予定です。詳しくはコーディネーターの竹ノ内会員による「シンポジウムの概要」をご参照ください。ミニシンポジウムは、昨今、何かと話題になることが多い、大学による地域貢献活動を水産業の発展と絡めて議論していただく予定です。天野会員がコーディネートをしております。

多数の会員の皆様のご参加、個別報告をお待ちしております。

大会実行委員会委員長 山尾政博

広島大学東広島キャンパスへのアクセス

<http://www.hiroshima-u.ac.jp/top/access/higashihiroshima/>

交通機関についてのご注意：

新幹線駅は東広島駅（こだま、の停車駅です。そのため福山・広島での乗り換えが必要です。）在来線は西条駅、お間違いのないようご注意ください。

ホテルについてのご注意：

西条駅周辺に幾つものホテルがありますが、学会シーズンなど取りにくいことがございます。お早目の予約をお勧めいたします。なお、新幹線駅周辺にもホテルがありますが、交通の便、食事をとる店がないなど、お勧めはいたしません。

2) 実施概要

(1) 日程

10/24（土）午前：各種委員会・理事会

午後：個別報告・ミニシンポ・懇親会

10/25（日）午前：シンポジウム報告

午後：コメント・総合討論・総会

(2) 場所

〒739-8528 東広島市鏡山1丁目4-4 広島大学生物生産学部

※詳細については、別途案内します。

(3) 参加費

参加費：2500 円（要旨集代込み。個人会員、学生会員ともに同額）。

3) シンポジウムの概要

シンポジウムコーディネーター 竹ノ内徳人

1. テーマ

新しい地域漁業の姿を提案する（案）

2. シンポジウム趣旨

周知のように水産業を担う多くの漁業地域では、過疎化・高齢化、後継者不足、資源悪化にともなう漁獲量低下、市場流通の機能不全による魚価低迷など枚挙に暇がない。新たな水産業として展開するには、多くの研究者、識者が指摘するように先進事例に学びつつ、新たな管理手法を用いて資源管理を実施すれば自ずと光明が開けるとい議論にも異存はない。

一方で、2014年度（平成26年度）の制度的支援としての水産業関連予算は、前年度補正予算と合わせて約2500億円規模となっている。「地方創生」や「まち・ひと・しごと創生本部」の設置など現政権の地方活性化策が注目されているのも事実であろう。しかしながら、その背後には2014年5月に日本創生会議が発表したいわゆる増田レポートによる、2040年までに全国約1800の市区町村のうち半数にあたる約900自治体が消滅する可能性がある、と指摘されたことも一因と言えよう。

人口減が地域産業の根幹を揺るがす重要な問題であることは確かだが、従来までの成長戦略的な議

論にもとづいた政策・施策のままでよいのか。やはり、地方ならではの社会・経済・文化のあり方という根本的な議論を丁寧にしていく必要があるのではないか。

新しい地域漁業のあり方として地域の活力を再生・再興するには、地域に根ざした生活者＝水産業関係者がいったい何を望んで、どのような施策が有効なのか、地域資源や暮らしを守り支えるという地域の個別・固有の問題に寄り添いながら考えていく必要があるように思える。

したがって本シンポジウムでは、さまざまな問題に直面する多くの漁業地域の持続可能な存立について「生活者の視点」で捉えなおそうとしている。そのねらいは、存立が危うい漁業地域において、現在の実情を直視した新しい地域漁業・漁村社会のあるべき姿について持続可能な戦略とはなにかを検討しようとしている。その際、経済的側面と非経済的側面の両面からアプローチし、漁業地域における生活者としての取組み、価値、伝統・文化に寄り添いつつ、経営・人材・漁村社会を連動させることを試みる。

例えば、高齢化・過疎化が進む漁業地域において、新たな漁業ビジネスに対する資金調達への銀行の役割とは何か、漁協（信用事業）との相違は何か。既存の漁業者たちの新しいビジネスの形態とはいかなるものか、新たな雇用ならびに新規参入者の受け皿となりえるのか。交流・連携・協働が漁村地域にもたらす効果やメリットとは何か。漁業地域にはどのような人材が必要で、どのような育成システムが必要なのか。そして最後に、漁業地域で地道に活動を続けてきている生活者＝漁業者関係者とはいかなる人たちで、そしてどのような成否をもたらしているのか、を検証しようとしている。

3. 構成（報告タイトルは仮題）

コーディネータ＝竹ノ内徳人（愛媛大）・山尾政博（広島大）

第1報告＝板倉信明（水産大）

新しい漁業経営としての地域営漁組織・LLPの現状と課題

第2報告＝三宅和彦（愛媛銀行）

6次産業活性化のための経営者のあり方

第3報告＝岸上光克（水産大）

交流・連携・協働による漁村再生の可能性

第4報告＝天野通子（広島大）

漁業・漁村社会への人材育成のあり方

第5報告＝辰巳佳寿子（福岡大）

生活者の視点からみる漁村社会の現状と展望

4) ミニシンポジウムの概要

ミニシンポジウムコーディネーター 天野通子

テーマ：地域漁業と大学—地方創生と人材育成の視点から—(仮)

地方の衰退が叫ばれるなか、各地で様々な取組がおこなわれている。こうしたなか、大学では地域をフィールドに地域課題解決を目指した学生や地域の社会人に対する教育や研究活動をおこなっている。これまでの大学による地域志向型の活動は、地域漁業とどのように関わり、それらは真に地域貢

献につながるものであったのか。

地域志向型教育や研究活動に取り組む地域漁業学会関係大学が集まり、これまでの大学による地域貢献活動の検証をおこない、今後の目標設定や進め方の方向性はどうあるべきか議論する。

解題 広島大学 天野通子

報告 島根大学 伊藤康宏

愛媛大学 若林良和

水産大学校 甫喜文憲

広島大学 大泉賢吾

2. 第56回大会印象記

1) 「漁業」の営みと実践から「地域」を問い直す

長崎大学 黒田 暁

「身近な自然」をとりまく人びとの環境認識や地域社会の資源管理のあり方をフィールドワーク（現地調査）から問う。環境社会学・地域社会学をおもに学んできた私にとって「地域漁業学会」とは、今大会（56回大会）に初めて参加、個別報告をさせていただくまで、長い間、遠いような、しかし近くでもあるような存在であった。

2004年から東北地方太平洋沿岸に位置する宮城県石巻市北上町において共同調査研究を行ってきた。海や山、川から湿地に及ぶまで多様な自然資源を集团的に利用し、自然からその恵みを巧みに引き出しは独自のルールによって資源利用を制御し、生活に即して組み立てていく漁村集落の人びとの営みに魅せられ、引き込まれていった。早くから“地域の漁業”についてその歴史や資源管理の変遷を調べてはいたのだが、「漁業研究」をしている、という意識はなかった。生産・経済活動としての漁業に関しては知識も認識もまったく不十分だったからだ。その意味で「地域漁業学会」への足は遠のいたままだった。

そんな折、2008年の地域漁業学会50回大会（広島大学）のシンポジウムのテーマ「地域漁業と多面的機能」の目的設定と内容に目を見張らされた。知己の研究者（環境社会学）が登壇されていたこともあったが、「漁村社会を活性化する枠組みを、地域漁業がもつ多面的機能という視点から議論する」まなざし——多面的機能論を、できるだけ多元的な視点で構成し直す、という論題に“近さ”を覚え、報告と議論にぜひ参加させていただきたいと考えるようになった。その後タイミングに恵まれないうままであったが、2011年の東日本大震災を経て、私たちの現地での調査活動は、調査研究とも生業復興支援ともつかないものとなっていった。地域漁業をめぐる自然と社会が大きな変動に晒されるなかで、何を問い、いかなる答えを求めべきなのか。震災前と震災後のこれからをつなぐため、「地域漁業学会」でこそ問わせていただきたい。そう考え、共同研究者の高崎優子（北海道大学大学院）とともに連番での共同研究報告に臨ませていただいた。

自分たちの報告の前後では、A会場とB会場を奔放に出入りさせていただきながら、他の個別報告

を拝聴させていただいた。そこで驚かされたのは、想像以上の“近さ”である。報告者とフロアのやり取りの距離感が、たんに“近い”というだけではない。一連の応答には、地域漁業の実践に迫る目線で寄り添いながらも、その一方でそこから「地域」というフレーム自体をとらえかえそうとする複眼的・多面的なまなざしが貫かれていたからである。「漁場認知体系」から「精霊信仰」に至るまで、地域漁業の実践を媒介として、一見“遠い”事象が、実感とともに引き付けられ、議論の俎上に載せられていく。そこから生まれる共感の応答が、心地よいほどに近く、温かみを感じることができた。自分たちの報告にかんする質疑応答や報告後の対話でもたいへん多くの刺激と知見をいただけたが、それ以上に、今後の調査研究のさらなる展開や成果をまたぜひ議論させていただきたいという強いモチベーションまでお土産として持ち帰ることができた。収穫の多い初参加であった。

2) 「地域性」を中心に、「学際性」、「国際性」も発展

日本福祉大学 磯部 作

私が、本学会の大会に最初に参加したのは、1974年の岡山大会である。40年以上に亘って本学会で学ばせていただいているが、地理学会や環境学会など十数の学会に所属しており、これまでに多くの学会の大会に参加してきた経験から、本学会の大会での誇るべき特徴の一つは、懇親会の料理であると考えている。本学会の懇親会では、大会開催地の漁連などの御協力で、地元産の本当に美味しい魚介類が食べられる。今でも大分大会でのカレイ、愛媛大会でのタイなどが思い出される。今大会では、話題の「伊勢マグロ」などを頂いた。美味しい魚を食べられる大会は本当に素晴らしい。

そして、この「伊勢マグロ」などの海面養殖業を取り上げたシンポジウムが開催され、テーマは「沿岸漁村の地域マネジメントと海面養殖業」であった。シンポジウムではこれまでの学会のレビューを踏まえた解題報告があり、それを踏まえて、日本全体、福井県や愛媛県の事例とともに、三重県についての報告が多くなされ、「伊勢マグロ」が養殖されている南伊勢町の事例も報告された。どの報告も充実しており、コメンテーターの方々のコメントも的確で、「漁協全般としては、国内市場を最優先にする」ことなどが指摘された。私は、シンポジウムの研究企画委員でもあったが、南伊勢町については、体験漁業や津波防災などについて調査をして7月に簡単にまとめを書いており、現在、伊勢湾の「漁船操業実態等に係る委員会」の委員長もしているだけに、三重県についての報告を中心に、シンポジウムの報告や討論を興味深く聴かせていただいた。

また、今大会の個別報告では、漁業管理、漁協経営、水産業活性化、マーケティング、淡水養殖、震災復興、近世の捕鯨業、環境保全、環境教育など多彩であり、アジアやアフリカ、南アメリカなどの海外の報告も多かった。

「地域」をテーマに入れたシンポジウムや、学際的で国際性のある多くの個別報告からみても、1995年に「西日本漁業経済学会」から「地域漁業学会」に改組して20年、「地域性」を中心に、「学際性」、「国際性」の特徴は発展してきている。

ただ、本大会の日程は2013年度より、2泊3日から1泊2日に短縮されたものの、最近では大学なども多忙になり、大会への出席がかなり困難になってきているようにも感じられる。しかし、事務局担当の方など、万難を排して参加している人も多く、学会の運営や発展のために、是非より多くの方々に大会に参加していただきたい。

3. 第56回大会報告

1) 第55期決算報告

(1) 収入の部

費目	55期予算額	決算額	増減(決算-予算)
前期繰越金	3,125,786	3,125,786	0
会費収入	1,660,000	2,570,000	910,000
一般会費	1,500,000	2,340,000	840,000
学生会費	150,000	210,000	60,000
団体会費	10,000	20,000	10,000
大会参加費	70,000	53,000	(17,000)
抜刷自己負担金	50,000	12,400	(37,600)
学会誌販売収入	250,000	216,000	(34,000)
投稿料収入	300,000	300,000	0
寄付金	0	100,000	100,000
雑収入	1,000	171	(829)
著作権	0	29,991	29,991
合計	5,456,786	6,407,348	950,562

(寄付金は近藤信義会員からのものである。)

(3) 財産目録

種別	残高
銀行預金	1,053,865
郵便振替	3,606,160
現金	92,758
計	4,752,783

(2) 支出の部

費目	55期予算額	決算額	増減(決算-予算)
本部事務費	190,000	127,174	(62,826)
通信・郵送費	130,000	106,119	(23,881)
労賃・謝金	50,000	14,000	(36,000)
消耗品費	10,000	7,055	(2,945)
学会誌作成費	2,020,000	1,349,391	(670,609)
印刷費	2,000,000	1,318,380	(681,620)
労賃・謝金	20,000	0	(20,000)
消耗品費	0	31,011	31,011
名簿・会報作成費	0	0	0
理事会運営費	0	0	0
部会費	0	0	0
委員会費	0	0	0
学会賞副賞費	10,000	0	(10,000)
大会準備費	200,000	178,000	(22,000)
(内要旨集印刷費)	100,000	78,000	(22,000)
学術会議等団体活動費			
予備費	10,000	0	(10,000)
小計	2,430,000	1,654,565	(775,435)
損金			
次期繰越金	3,026,786	4,752,783	1,725,997
合計	5,582,322	6,407,348	825,026

2) 第56期予算計画

1. 一般会計の部

(1) 収入の部

費目	56期予算額	55期予算額	増減(56期-55期)
前期繰越金	4,752,783	3,125,786	1,626,997
会費収入	1,660,000	1,660,000	0
一般会費	1,500,000	1,500,000	0
学生会費	150,000	150,000	0
団体会費	10,000	10,000	0
大会参加費	70,000	70,000	0
抜刷自己負担金	50,000	50,000	0
学会誌販売収入	250,000	250,000	0
投稿料収入	300,000	300,000	0
寄付金	0	0	0
雑収入	1,000	1,000	0
合計	7,083,783	5,582,322	1,501,461

(2) 支出の部

費目	56期予算額	55期予算額	増減(56期-55期)
本部事務費	190,000	190,000	0
通信・郵送費	130,000	130,000	0
労賃・謝金	50,000	50,000	0
消耗品費	10,000	10,000	0
学会誌作成費	2,020,000	2,020,000	0
印刷費	2,000,000	2,000,000	0
労賃・謝金	20,000	20,000	0
消耗品費	0	0	0
名簿・会報作成費	0	0	0
理事会運営費	0	0	0
部会費	0	0	0
委員会費	0	0	0
学会賞副賞費	10,000	10,000	0
大会準備費	200,000	200,000	0
(内要旨集印刷費)	100,000	100,000	0
予備費	10,000	10,000	0
小計	2,430,000	2,430,000	0
次期繰越金	4,653,783	3,152,322	1,501,461
合計	7,083,783	5,582,322	1,501,461

3) 学会賞受賞者

2015年の地域漁業学会(三重大会)においては、学会賞選考委員会の審議の結果、中楯賞、柿本賞、および学会賞、いずれも該当者はありませんでした。

4. 研究会報告

近畿部会と立命館大学言語文化研究所「日本人の国際移動研究会」との共催研究会

近畿部会長 増崎勝敏

2014年12月21日に、近畿部会は立命館大学言語文化研究所「日本人の国際移動研究会」との共催研究会を、コンソーシアム京都で行った。テーマは「1930年代における日本人漁業者の国際移動」であった。参加者は約20名を数え、本学会からは関西学院大学の田和正孝会長、愛媛大学の若林良和前会長をはじめとした参加があった。

まず、立命館大学の河原典史氏による趣旨説明が行われた後、立命館大学の小川真和子氏と非会員の鹿児島県立短期大学の福田忠弘氏による報告がなされた。

小川氏は「国家と漁船－1930年代～1940年代のハワイならびにアメリカ西海岸におけるアメリカ合衆国の漁業政策について」というタイトルで報告を行った。報告では1930年代から日米開戦、戦時下におけるアメリカ合衆国政府、米海軍の対ハワイ漁業政策の検討などがなされた。ここでは、アメリカ合衆国公文書館に所蔵されている米海軍資料・米連邦政府商務省・内務省資料等の実証的な分析による検証が行われた。

福田氏の報告「南洋漁業開拓者・原耕の業績とその影響」では、原耕（1876年～1933年）を取り上げ、彼の南洋漁業開拓事業に焦点をあてた検討が示された。ここでは原の事業が南洋における民間での大規模カツオ漁の初期成功事例であったことや、その成功が静岡・沖縄の漁業者およびカツオ節加工者が南洋群島へ進出する契機となった点などが述べられた。

両氏の報告内容は、ともに1930年代の日本人漁業者をめぐる海外の活動について具体的かつ詳細に分析をおこなったものであり、地域性・学際性・国際性を謳う本学会にとってもたいへん意義深いものであった。

近畿部会としては今後ともこうした他学会等との交流などを通じて、活動の活性化を積極的にはかってゆきたい。

5. 事務局便り

1) 個別報告・シンポジウム原稿等の受付について

個別報告を希望される会員は、タイトル、報告者氏名（複数の場合は全員）、所属（同左）、要旨本文を A4 用紙 1 枚（縦置き横書き）に収めた Windows 版一太郎または word ファイルを、メールもしくは郵送で下記へ送付してください。また原稿ファイルとは別に、報告者の読み仮名と、プロジェクター等機材使用の有無をメール本文や別紙でお知らせください。なお、メールによるファイル送付の場合は事務上の行き違いや送受信時の事故を考慮して、送信後 1 日たっても返事がない場合は印刷原稿 1 部を下記へ Fax または郵送してください。締切は 9 月 24 日（木）必着です。お送りいただいた原稿は報告要旨集に収録して配布・販売するほか、地域漁業学会の HP 等に掲載・公表される事があります。ご了承ください。

なお、シンポジウム・ミニシンポジウムの報告者の方は、枚数制限はありませんが同様の内容を 9 月 24 日までに申込先へ送付してください。また、コーディネーターより指示がある場合はそちらにしたがってください。

<申込先> 〒890-0056 鹿児島市下荒田 4-50-20 鹿児島大学水産学部地域漁業学会要旨集担当

Fax. 099-286-4280 電子メール：sakuma-eco@nifty.com

2) 学会賞の推薦について

「学会賞」、「学会奨励賞（中楯賞）」および「学会功労賞(柿本賞)」の推薦がございましたら、被推薦者の氏名、同勤務先、推薦理由、その他必要事項を文書にて、10 月 14 日（水）必着で下記宛にお送りください。なお、締切後の推薦については学会本部事務局までお問い合わせください。事情により推薦を受け付けることもあります。

<送付先> 〒890-0056 鹿児島市下荒田 4-50-20 鹿児島大学水産学部地域漁業学会

Fax. 099-286-4280 電子メール：chiikioffice@gmail.com

地域漁業学会 <http://jrfs.org/>

本部事務局 〒890-0056 鹿児島市下荒田 4-50-20
鹿児島大学水産学部内
Tel&Fax 099-286-4280
担当 佐久間美明 chiikioffice@gmail.com
郵便振替：01750-0-83886
銀行振込：鹿児島銀行 鴨池支店 普通 3354886